

詩誌 立彩

Rissai: A Journal of Poems



第 14 号
2018 年 9 月

目次

相澤	ゆかり	あなたへ	1
池田	昌子	ルソーと平和	4
		リネン	6
		竹林	8
伊東	友乃	朝	10
		苦く	12
		夏の庭	14
画図	佳織	雀の時間	16
田中	はじめ	静かに美しく	18
		雨のジミーへ	21
當津	宏昭	ブレーキング・ファスト	22
		子宝	24
戸張	雅登	Wiped Away	26
		灯台に群がる虫	28
東野	潤	初恋は雷のように	30
		ぼくらの生命	33
渡辺	信二	蜘蛛の糸	34
		人と蝶	36
表紙原画			
鈴木	順三	「反復快樂 1」 (表紙)	
		「反復快樂 2」 (裏表紙)	

あなたへ

相澤 ゆかり

1

あなたは 4月に逝った

それは 取り返しのつかない欠落

職を賭しても

命を賭しても

あなたの成し遂げねばならなかった夢が

今なお 遠くに見えているのに

あなたは 逝った

2

4月に逝ったあなたは

大好きだった梨の季節を

もう待てなかった

あの夏

ナイフを片手に
梨を剥きながら
一切れをナイフに乗せて
わたしに くれた
あれが最後の夏とは知らず
熱く 政治を語った

切っ先の鋭いナイフだった

3

確かに4月です
あなたの息の 強さ弱さに合わせて
病室の窓に 花吹雪
五弁の飾りが
空を 白くも黒くも 覆っていた

4

おお 五弁の花

清らかな短命

そんなにも たくさんの花薬（はなしべ）が
路上から かさこそと 風に送られ
草葉の陰へ帰ってゆく

5

あなたに伝えるすべもなく
でも 死ねば 花薬なのか
わたしはまだ その先へは行けない

ルソーと平和

池田 昌子

ジャッカルは素朴に楽しむ
樹木が純真に匂う
ハスの葉がマリンブルーとピンクに輝く
中心には 黒い人影
太陽の黒点のように
蛇を遣わせし者 フルートで目が覚める
神は黒人であった
裸婦は 日曜日の午睡中に
カウチごとジャングルに運ばれてきた
驚きも喜びも超え 己の運命を見つめる
熱帯夜 満月
ジャングルの中は平和でしたか
いえ あれは肥大化したガーベラです
鳥 サル ライオン ゾウから消費税は取れませんよ
ルソー君 オレンジ色のへビを見たまえ
ジャングルの中は平和ですか

へビは恐いが オレンジ色は可愛らしい

遠近法もデッサンも超え

現実さえも超え

無邪気に絵筆を握り続け

二人の妻を見送って 描き続けています

ジャングルの中はなお平和でしょうか

リネン

池田 昌子

大理石に響くヒールの音

毛皮と金の首飾り

黒服の男が会釈する

用意された空間

銀食器とクリスタルガラス

理念なきテーブルクロス

慇懃な挨拶

シャンパン オードブル

えっ いきなりパンを食べますか

無礼を見過ごして お決まりの自慢話

アンドン文明ですか ナスカですか

侵略者は恐れ知らず きつと嘘つき

用意された庭

金色のギンギョウ 銀杏の葉

赤い実を突く黒い鳥は不吉

弦楽四重奏も聞かずに姦しい

舌平目のムニエルが崩れる
フォアグラをナイフで突く
黒服の男がそつとワインを注ぐ
デザートもコーヒーマ
態々一口ずつ残して
リネンのナプキンで口紅まで拭う
礼節知らずして衣食たる

竹林

池田 昌子

七夕の時にしか会わない友と竹林を歩く
千本の竹はまっすぐに伸び

光る君でも出てきそうな緑葉の空間

黄緑色の天井から彩やかな風が降りてくる

竹は軽く強いが中は空洞だ

高く伸びるための節

尺八は自然と一体となって音を出す

空の空いっさいは空である

かつて筍の取れた里山は荒れるに任せ

竹の花が咲いたのでは無いが

竹林は根が浅く 突然に土砂崩れを起こした

何かに報復されているのだろうか

強くしなやかに生きるには覚悟がいります

胆嚢摘出して軽くなったとか
断捨離するとか

友と軽口を叩き お抹茶を戴く

竹林の風はどこまでも静かだ

朝

伊東 友乃

いつだつて 血が薄いのが原因だ
くしゃみで目覚める朝
鉄剤の丸さに 見とれるのも
病院の一室で
するどい叫びをあげるのも
すこしばさついたパンの欠片は
甘みのかわりに唾液を 吸って
予感させる
対処できないほどの
季節のおおきさ
きみが言うように
どんなに 風がかわったところで
見晴らせない
今日ですら くり返している 私たち
たぶん息づきすら 忘れて
異端や末端は ここかしこに

ベッドのわきに置きかけのまま

鏡のなか

幸せを

ゆで卵みたいに ぼろぼろ砕いてみれば

出てくるのは ほら

臍のしたの 動き

二メートルの塀のむこうに

どこにも飛べなかった

ビニル袋

雨水を吸って

色をかえて透きとおる

なかには 朝が

ひたひた 溜まって

きらきら 光って

挨拶の時間がやってくる

苦く

伊東 友乃

夕暮れをひとつ
まろく腕のなかに入れたら
穂の匂いが 線路をわたって
なだれこむ
いつかの憧れは 諦めとまじって
ともに金属音をひびかせる
行けなかつたわけではなく
帰ることを選んだと
手をにぎり
その柔らかさと
あたたかさは 溶けたばかりの夕陽
もし
が あるならば
もし
は 決めないのだと
ころろはいつまでも 傾ききれない

虫の音は大きくなるばかりで
飲みこんだ言葉たちが
口のなかで 青く苦くなる

夏の庭

伊東 友乃

夕暮れの庭にかくれた偶然
ひぐらしの声が聞こえる

雲がかかる
時間が遅い

きみのまるいちいさな肩には
やさしい光がすんなり落ちて
あたたまっている
その傍らの 錆びたガラス窓が
遠い空をうつしだす

(いっしょに行きたかった
けれども 行ってしまったのは きみひとり)
忘れることなどけっしてできない

いのちの影が濃く揺れる

迎える覚悟などないまま

この古い家を出ることになる

夏は永遠にとどまるかのように

庭にうずくまる

軒下の 虫たちの亡骸が

つややかに 空を見上げる

雀の時間

画図 佳織

雀は死んだとき
なにももっていないかった
虫も啄んでいなかったし
青葉で遊んでもいなかった
老衰なのか
病気なのかもわからなかった

雨が降り
暑い日々が続き
台風が吹き荒れ
空がさっぱりとしたとき
小さなからだは
やわらかな羽毛をひとつも残さず
消えていた

雀はもっていた

わたしには
片手で掬えるほどの時間だったけれど
うずくまり
断固とした態度で
別れられるほど十分に

静かに美しく

田中 はじめ

おれが自然だ おれが永遠だ
やあ ありがとう そう言ってくれて

昔は特に詩人が讃えてくれた

「死すべき人間 永遠の自然」

「変わらない自然」――

でもそれは 戯言（たわごと）だ

そもそも 君たちの科学が

まるでガンの余命告知のごとく

太陽の寿命を ざっと一〇〇億年と見積もり

既に四五億年が経過しており かつ

太陽が輝きを増し膨張を始めたので

今はもう 折り返し地点にいるのだと断定する

太陽の最終の姿は 赤色巨星――

原子核融合を光エネルギーの源とするが

一生の終わりに近づくと
水素の燃えかすヘリウムや
さらにその燃えかすの炭素や酸素たちが
エネルギーバランスをくずすので
熱やガスを激しく放出し
火星に届くほどに膨らむ

全ての生命は その膨らみの中で死滅し
誰も 赤色巨星を見る者はいない
太陽は その後 白色矮星となるが
それが 恒星の辿る道です
そして おれのほうは
吹き飛んでいるか それとも
徐々に冷えて絶対零度に近づく

え？ 地球を恒星にしたいくて
今 原発や原爆で核融合実験をしてるって？
それで じぶんたち 生き延びるつもりなのか
地球が太陽になったら それこそ
おれも君たちもすぐに死ぬ

せめて 君たちよりは おれが長生きするべきだ

早く 君たち みんな いなくなつて

緑の地球を返してくれ

君たち たかだか 二〇〇万年だろ

死者に花を添えたのは 君たちの二〇万年前からだ

確かに おれも滅ぶ

滅ぶのだが まだ五五億年あれば

たとえ 五〇〇万年で割つても 一一〇〇

つまり あと 一〇九九回の失敗が許される

そのうち きつともつと

まともで穏やかな生物が生まれる

おれは そうした者たちとともに

そつと静かに滅びたい

おれは 地球の最後まで 静かに美しくありたい

雨のジミーへ

田中 はじめ

ジミーは雨が降っても

新聞を配達するのが仕事です

新聞を決して濡らさぬように

小雨だって豪雨だって

とにかく ひたすら走って

駆け足の隙間から 空気を吸って

乾いた新聞を届ける

雨は水 水は水素と酸素だが

雨なら 悲しい涙と思ひ

水なら 溢れて 海に流れる

人の世も水に流れる

これが ジミーの生活です

ジミー只今 十八歳

ブレーキング・ファスト

當津 宏昭

休職に入って一週間

以前と同じ時間に目を覚まし
ベランダで朝陽を眺めてみる

カラスの鳴き声が聞こえる

もう家を出る時間だ 以前なら

でも今は 何もしない

近所の畑の匂いがする

そうか 久しぶりに

お腹がクウと鳴ったかな

朝食を摂らない生活が普通だった

朝はお腹が減らないと思っていた

こうして「何にもしない」をしていると

色々発見があるものだ

私は飢えているのだな
ひとまずスープでも食べることにしよう

子宝

當津 宏昭

私事ではありますが
周囲で出産ラッシュです

「妊娠しました」「産休取ります」

「女の子でした」「退院します」

タイムラインに次々上がります

私に子を持つ予定はないし

一言「おめでとう」としか言えませんが
でも新しい命の報に接して

穏やかな気持ちになるのは本当です

健やかな成長を願いつつ

この子らは多分大丈夫と

不思議と楽観的になるので

所詮は他人の子だからでしょうか

無責任ですかでも本心です
よもやこの子らの頭の上に
飛行機とヘリがいつぺんに落ちるような
そんな不幸はないでしょう？

Wiped Away

戸張 雅登

鼓動する体育館 壁からにじみ出る涙は
滝となって床にそそぐ
渦から湧き上がる白い泡たち

水をかき分け 蠢く学生
エメラルドグリーンの水面を
二階の手すり越しにのぞく

人の合間を狙って プールにダイブ
深く沈んで ワックスの効いた床に
着く膝 宙に浮かぶバスケットボール

涙は二階の窓から溢れ出て
車道の車を押し流す
魚になった僕たちは
車を縫って 湾へと進む

引き潮が沖へと連れ去る
人も車も家も木々も

街は跡形もなくなつて

僕は隣の三毛猫と肩を並べて

海中を進む 大きな川の流れのなかで

僕らは海底にぶつかつて

宙に浮かぶ

小さな魚が素知らぬ顔で通りすぎる

大きな力に引つ張られ

瓦礫の塊となつた街は

湾へと押し戻される

涙は退いて 僕は岸边にたたずむ

ただ 行くあてを 失つて

灯台に群がる虫

戸張 雅登

雨で満たされたバスタブに 顔を埋めて
泣いたふり

「大丈夫だよ」って言われたくて
身を沈めて待ちぼうけ

あなたの笑顔がわたしの救い
岬に立って海を照らす

月の明かりと間違えて
海面に漂う魂たちが
引き寄せられる

あなたの美しさと栄光が
海底に横たわる亡骸たちを
すくい上げる

誰にも気づかれずに逝った船員たちは
死んだことさえ認められずに
この世界をさまようだけ

人工の光に導かれ
わたしたちは上陸する
そして気づく

そこには誰もいないのだと

初恋は雷のように

東野
潤

初恋は 不意に始まる

プロローグもなく 言葉もなく
雷のように 初恋が ぼくを打つ

いつまでも 見つめていたい

どこかしら 触っていたい

ああ 抱きしめたい

キスします キスしてください

キスします キスしてください

引き寄せてキスをする――

ああ 美しい！

互いの魂が混じり合い

一気に 空へ高揚してゆく

あなたの姿は
いつまでも消えない烙印（らくいん）

あまりに美しい――

美しかった その初恋が
不意に終わる

美しすぎて ズキズキ 痛む

傷に負け 水ぶくれとなり
紫色に爛れて

行かないで わたし 行きます

ちよつとだけ 行かないで
わたしたち 終わったのよ

まるで 雷に打たれたように

ぼくはもう 立ち直れない
もうキスもなく あなたが去る

初恋は エピローグもなく
言葉もなく 風のように
ぼくを 吹き抜けてゆく

ぼくらの生命

東野 潤

世間に追い詰められた
哀れで目立たぬ生活だけど
ぼくらは それがとても愛しい

せめて 健康には気をつけて
たまには牛肉も ちゃんと食べよう
そう 睡眠もたっぷりとする

天気の良い日は ひなたぼっこだ
悠久のエネルギー 太陽は
誰にでも 差別なく注ぐから

社会のデータにも上がらない
野暮な生活だけど そのなかになお
ぼくらの強かな生命が息づく

蜘蛛の糸

渡辺 信二

もしもクリスマスチャンなら
何も飾らず 限りある生の向こうへ
手を差し伸べるでしょう

苦難に遭って 頭の中が真っ白になろうとも
生を諦めず 光の方へと努めて
力尽きれば 神に全てを委ねるでしょう

ぼくの日々の思いは だけど
目先の欲望にこの身を焼きながら
その日 その日を送ること

己を頼むだけで
委ねることを知らず
安心立命（あんじんりゆうみょう）を得ることがない

ほんとうは リルケの言うように
限りあるこの生のかなたへ

身を差し伸べなければならぬはずなのに

仏教徒にも 儒者にも なれず

すべてを絶対のものに任せられない
心が動揺し続ける

ダメなのです 天命を全うできず

人為によって いつも

この生を損なっております

せめて この世にも蜘蛛の糸があれば

わが運命のお試しが出来るのに

と願うこともない

人と蝶

渡辺 信二

目の覚めるような色を纏って

蝶が 舞う

まるで 人を欺くように

複葉の羽の 奇妙な軌跡――

人には見えない扶翼の止まり木を

行きつ戻りつ 空中で

蝶が しばし 時間を停止して

死のステップを測る

蝶に見入る者は 幸いである

蝶の生涯も夢も 人には見えない

蝶に生まれた者は 幸いである

寿命は 3週間から4週間

長くて 1年

人には見えないものを見抜いて行く

2018, 03, 13～2018, 07, 31 のあいだに贈られた詩誌・詩集その他
詩誌

『リンゴの木』 48、49。

『うたたね』 3。

『Gate』 26。

『銀曜日』 48。

『光芒』 81。

詩集その他

網谷厚子『エッセイ集 陽をあびて歩く』待望社、2018年。



詩誌『立彩』第14号 2018年9月10日発行

頒価 300円

編集発行 「立彩」

〒400-8555 山梨県甲府市横根町 888

山梨英和大学人間文化学部 渡辺信二研究室気付

印刷 東洋出版印刷株式会社 TEL 03-3813-7311